

自由なネコは「自由」をもとめるか

齋藤 純

タハリール広場の群衆が去った後、残った美酒を舐めた野良ネコは、ナイルに落ちなかったろうか。

炎天下のエジプト・カイロ市内を歩き回るのは、北国育ちで暑がりの私にとって命取りになりかねない。オフィスビルが林立するUAE・ドバイ市内やカタル・ドーハ中心地では、銀行支店やカフェに逃げ込めば火照った身体をクールダウンすることができる（それはそれで寒すぎるのだが）。しかし、カイロ市内を散策する際には、入念なコース設定が必要になる。交通渋滞も頻発するためタクシーを捕まえるのも困難であるし、クーラーの故障しているタクシーにうつかり乗ってしまった日には、熱気と排気ガス（とおしやべりなドライバーさん？）に数十分耐えなくてはならなくなる。

そんな暑がりの私が見つけた屋外クルースポットが「ギザ動物園」である。一八九一年開業の由緒あるギザ動物園は、民衆デモで沸いたタハリール広場から、ナイル川をやや南下した対岸に位置する。隣にはカイロ大学があり、木々の生い茂る閑静なエリアにある。民衆デモの歓声は、ここではないささか遠い。入場料は自国民が3LE（約四〇円）、外国人が20LE（約二六〇円）とお手頃で、カイロ市民の憩いの場にもなっている。外国人観光客とみるや、さまざまな有料オプション・サービスをおすすめしてくれるのは、ここでもおなじみである。

水族園でカラフルな魚たちを楽しむのもよし、涼しい木陰から常時夏バテ気味の草食動物たちを眺めるのも一興ではある。また、とある方法を使つて肉食の猛獣たちを直接触るスリルを味わうのも良いか。週末の園内は家族連れの市民で賑わい、動物を見て興奮する元気な子供たちであふれる。どこの国でも子供は動物園が好きなのだ。

日陰を探しながら園内を歩いていて気づいたことがある。結構な割合で空のオリがあるのだからある。結構な割合で空のオリがあるのだからある。家主の解説プレートは外され、雑草も伸び放題で荒れている。何ものオリなのか分からない。家主は外出中であろうか。しかし、園内スタッフに聞いても「ここには何もない」と答えるばかりである。

そんなとき、伸び放題の草が揺れることがある。藪のなかから現れるのは痩せたネコである。私感であるが、中東でも湾岸諸国の野良ネコはふつくらしいながら人も人見知りであるのと対照的に、カイロで見かける野良ネコは、ほっそりして人馴れしている。私のカメラから垂れ下がったタグに、ちよっかいを掛けてくるのは決まってカイロのネコだ。よくよくオリのなかを観察してみると、ネコは一匹だけではない。八匹ほどのネコが思い思いの姿で週末の午後を楽しんでいる。どこからやってきたのか、別の野良ネコがオリに滑りこんでいき、藪のなかのネコ溜まりに加わる。昼寝に飽きたネコは外へ出かけていく。どうやらこのオリは出入り自由のネコのテリトリーのようなのだ。

このような野良ネコグループが実効支配するオリは、ギザ動物園内に数カ所存在する。もちろんここに集う野良ネコたちは、ギザ動物園の本来の

住民ではない。カイロの路地裏や街路樹の木陰、駐車した車の影など、市内のいたる場所を気ままにすみかとし、動物園のオリのなかを溜まり場とする。動物園で頑丈なオリを正式に与えられた他の動物たちとは異なり、好きな場所で寝、好きなものを食べ、好きなときに気の合う仲間と集う自由を与えられているのである。

ギザ動物園の「自由な」ネコたちは、ナイルの向こう側、タハリール広場で繰り広げられた人間的なデモを、どう見ていたのだろうか。政治的自由を求めたエジプト民衆の群れに加わることは危険なので、ネコたちは一時的にタハリール広場から退避したろう。一方で、群衆が去った後タハリール広場でその日の糧を探していた野良ネコのグループもいたことであろう。

「祭」のあととて寂しい。ましてや「祭」に参加できなかった「自由な」ネコたちの心の中はいかなるものであつたろうか。日本の著名な「名もなきネコ」は来客が残した酒に酔い、水瓶に落ちて死んだ。カイロのネコは、来客が帰った後、どうしたのであろうか。



一時的に沈静化したタハリール広場（2012年3月6日）